

行動障害に対する施設での取り組み～生活支援と再構造化

社会福祉法人ひらきの里

施設長 松本 正

行動障害は、利用者の特性を支援者等関わる人たちが適切に理解できていないことで無理な対応となり、利用者にとって嫌いな刺激に晒され続けることで長期化することが少なくない。特にやり取りを含めたコミュニケーションや対人認知の問題、自身に掛かった負荷やストレスを上手く処理出来ないことや、感覚の特徴などの配慮が不十分なため、自閉症の方にとって過ごしにくい環境を生み出していると考えられる。言い換えれば、行動障害は私たちの関わりと無関係ではないという事を認識しておく必要がある。

この事例では、行動障害の改善に取り組んでいる過程で、行動障害をどのように捉え直し支援を組み立てるのか方向性を見失い、私たち支援者の力不足から新たな行動障害（破衣行為）が始まった。現在は、安定を取り戻し落ち着いた生活を送っていただいているが、それまでにどのような支援の難しさがあったのか、利用者の視点で支援を考える大切さという観点から報告していく。

平成15年から19年までの支援、見立ての切り替え、そして平成21年から現在までの支援状況という流れで大きく3つに分けて進めて行く。

○Aさん、40代前半の男性、3歳の時に大学病院で自閉症と診断されている。

小学校の言葉の教室で幼児期の教育を受け、昭和60年に児童施設に入所。

養護学校に通学し、一旦他の施設に入所されたが、平成3年ひらきの里へ入所された。

Aさんは、開所当初から他害・粗暴行為が見られ、平成8年に強度行動障害特別処遇事業対象者として3年間支援を継続した結果、以後は比較的落ち着いた生活を送っていた。

しかし、平成14年頃から、再び他害・粗暴行為が頻繁に見られるようになる。

近くにいた利用者の方に突然掴みかかり、蹴ったり叩いたり噛んだり、かなり恐怖感を覚える他害行為が日に5～6回あり、時には施設行事などで来られた外部の方に対しても、同様の行動がみられることがあった。発生場面は活動への移動中や、活動中が多く、突然表情が険しくなっていくことから、そのような時は、周囲の人と極力交わらないよう空間や移動の時間をずらし対応していたが、気持ちの切替えが出来ない時には人を探し他害に及ぶこともあった。また、当時は、履物へのこだわりが大変強く、スリッパを持って持ち主を探し回る、下駄箱の靴の配置が気になって、何度も整理を行うことが日常的に見られていた。

保護者の方との関係は、2週間に1度週末に帰省されていた。母子関係は信頼関係が強く、保護者の方もスキンシップを心がけ受容的な態度で接しておられたが、何か意に反する出来事があると他害行為で表現してしまうことから、自宅での生活状況も次第に悪化していった。また、不安定な時ほど食べ物への要求が強く、過食からの嘔吐も見られていた。

○平成14、15年頃の行動障害

他害行為「蹴る、叩く、噛む、頭突き」。

粗暴行為「ラジカセやテレビを投げる、日用品の破損や、建具の激しい開閉」などが見られている。

強いこだわり、物の配置、特に「下駄箱の靴、日用品の位置」

○Aさんの障害特性

視覚的な情報に強い。(細部に目がいきやすい)

発語は不明瞭な単語もしくは独自の発語でのレベル

一度覚えたものへの変化に弱い

視覚から簡単な内容は理解できるが、意味合いを捉えることが難しい

経験から学習し自己流に解釈するという特性がAAPEPの結果から見える

行動障害の要因について、Aさんの特性との関連性を整理してみる。

Aさんは、施設での日課に基づいて自分なりのルーティンで生活を送っていることから、日常的な状況変化に弱く予定の変更による混乱が見られていた。ことばの理解や表出ともに弱く経験に基づいての行動が中心であり、職員によって関わり方が異なることも混乱の要因の一つであった。また、活動中は自分のリズムを崩される事で他害に至ることが多く、見通しの弱さを補うため、どのような活動があるのか、活動をいつからいつまで行うのかということを知りやすい形で伝える必要があった。

物の配置や置き場所などにこだわりがあるAさんにとって、日常生活で気になるものが多い、その修正に追われ、落ち着いて生活が送れない状況にあった。Aさんのこのような生活状況に基づき特性に配慮した支援計画を検討後支援を開始した。

平成15年から、“Aさんの生活を過ごしやすい”を支援の大きな目標に挙げ、3つの視点で支援を開始した。

①一日の予定を理解することで、見通しを持った主体的な生活を送る。

②活動の量や開始と終わりの理解。

③こだわりを助長しない住環境の整備、

いずれもAさんのアセスメントから得た情報をもとにAさんにとって理解しやすい生活を目指し、環境調整を行った。

スケジュールの提示によって次の予定を伝えているが、Aさんは生活場面で気になることが点在していることから、今から何をするのかを理解しながら次の活動へ移っていただくために、カードを持って移動してもらい活動場所の所定の箱に入れてもらうという流れを整理した。



住環境では、活動がない時間帯は居室で過ごしているが、何もない時間帯にどのように過ごすのが苦手な上に、居室にも気になるものが多いことから、日用品の整理の仕方を伝えるのと同時に、居室での過ごし方が一目でわかるよう部屋の中のエリア分けを行った。新たな支援を始める際には、関わり方を統一することを支援者間で心掛けた。

生活の見通しをもってもらうため、開始と終わりの理解、分かり易い住環境の設定や、Aさんが得意とする視覚的な情報でスケジュールやワークシステムを組み立て、支援を開始した。周囲の状況の変化やルーティンで自分の生活を確認していたAさんにとって、スケジュールの受入は簡単ではなかった。当初は、1対1で流れを伝えても、ルーティンに戻ろうとすることや、視覚情報の細部に意識が向くため写真の提示を少しずつ減らし、絵カードのスケジュールを徐々に入れていった。

平成17年頃には、生活全般の予定を自分で確認することができるようになり、ある程度、生活に見通しを持つことが出来ていた。以前と比べ活動内容に対する理解の幅も広がり自分で行える活動も増えていった。

例えば、同じ衣類を何度も着るといふこだわりがあったが、何を着て良いのか分からなかったための行動で、タンスを整理することで、自分で管理できるようになった。居室の掃除など、手順を伝える事が難しかった活動が視覚的な情報によって行えるようになった。



その後もスケジュールやワークシステム、居室の構造化といったことを継続していたが、一日の予定や活動の見通しの無さからくる他害行為が軽減されても、機嫌良く音楽を聴いている時に、突然誰かを叩く等、突発的な他害行為は見られており、他害行為そのものの改善には至らなかった。

平成18年頃から、着用している衣類を頻繁に破ってしまう行為が新たに始まった。これまで、衣類が濡れたら破る、タグの肌触りが気になって破る等、原因がはっきりしていたが、それらに配慮しても破衣行為は続いた。次第に何の刺激も無い



と思われる時にも着ている衣類を破るようになり、Aさんの生活の中には他害行為・粗暴行為に加えて破衣行為が入り混じり、支援開始前よりも状況は悪化していった。この頃は、こだわりも増え、下駄箱の履物の置き位置の確認動作、靴下を繰り返し引っ張り上げる、衣類の着脱の際、衣類を力一杯ふるった後に着るといった行動が毎日見られ儀式的行動が増えていった。

支援を開始してスケジュールの意味がある程度理解でき、活動の変更や住空間においても雑然とした状態からくる混乱は減少した。しかし、儀式的な行動は増え、他害行為に大きな改善はない上に、新たに破衣行為も始まったため、再評価を目的に、支援者が1対1で行動記録を取り行動の要因を探ったが、Aさんの行動障害の具体的な要因を捉えることはできなかった。事故やけが等に至る危険性があるような他害行為も見られていたため、安全管理に重点を置いて、食事や入浴など生活全般にわたり場所や空間を分ける、時間をずらすなどしたことから対応の個別化が進み、やがて周囲の利用者たちと隔離された生活になっていった。

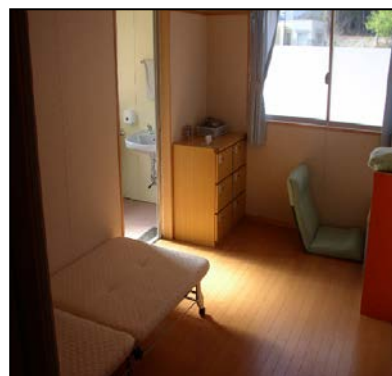
衣類を破損した時の提供方法や物が壊れたときの対処方法、スケジュールカードの準備や回収など、Aさんに対する支援マニュアルは存在していたが、支援者が関わるポイントが増え過ぎ、Aさんとの関わり方にズレが生じ、対応に一貫性がなくなり曖昧な支援になっていくなど、支援方法を維持することも難しい状況となっていた。

支援者は、行動障害の要因が掴めず行動の改善に至らないことから、次第に場当たりの対応となり、悪循環から抜け出せない状況に陥っていた。

その頃、保護者からは『皆と一緒に活動させて欲しい、スキンシップを密にして欲しい』という要望も聞かれていたが、安定しない状態での距離を詰めた関わりは逆効果になると考え、保護者が希望する支援は行わなかった。本来、保護者とは比較的良好な情報交換ができていたが、要望が聞き入れられない、支援者としても今その取り組みを行うべきではない等の意見の対立から、施設に対しての不信感が生まれていった。この頃、支援者側優位の考えが中心となり、何とかしたいと思いつつも、破られた衣類の確保はどうするのか、この時間帯は集団を避けよう等、目の前の出来事に追われてしまい、事の本質が見えないまま混沌とした状態が数カ月間続いた。

その後この状況を切り替えるヒントになった出来事に支援者が気付く。

一つは、課業の場面でボールペンのキャップと本体の色マッチングの課題をAさんが行っていた時、違う色との組み合わせを始めた。支援者がキャップを確認したところ、入り方の感覚が他と微妙に異なることに気が付き、これまで間違いなく行っていた色合わせの課題よりも感覚的に同じ物を合わせることに意識が向いていることに気が付いた。些細なことだが、Aさんは、こだわりが強く行動がパターンのようになっていたと考えていた支



援者にとっては、そのことへの気付きは大きなものであった。

こだわりの内容や強さの変化という視点で行動を観察した時、生活場面でも同様の場面が下駄箱へのこだわりや、足を踏みならして歩くといった感覚に直結するようなこだわりが2・3年前に比べて次第に強くなっていたことに気付かされた。

もう一つは、ある日、保護者の方から、自宅に帰省しているとき、『一睡もしていない』との報告とともに、施設での様子について質問があった。生活棟の職員は“寝ている”との見解をお伝えしたが、丁寧に観察してみると、実際は横になっているのみで、些細な音ですぐに目を開ける状況であった。

そこで、以下のような行動障害の背景となる仮説を考えた。

<仮説1>「生活が息苦しい」

これまで、生活を過ごしやすくするために視覚支援に取り組み、実際ある程度の理解向上に繋がった。居室の場面では、Aさんの気になる生活用品をわかりやすく整理した。自由時間の過ごし方が苦手な方なので、ここは本読む所、横になって休む所と明確にした。結果、自分で生活用品を管理できるようになり、部屋での過ごし方も上手くできるようになった。その頃のAさんには必要な支援であった。

しかし、それぞれの意味を理解し、行動に移せるようになると、従わなければならない思いや、させられているという思いがあったのではないかと推測され、それが本人の負担となり、決まった工程にさらに違いを見つけ出してしまう状況に追いやってしまっているのではないかと。

<仮説2>「安心して眠れる環境」

居室内にベッドを設置しており、扉側に頭を向けたレイアウトとなっていたことで、感覚的な過敏性をもつAさんにとって、落ち着かず、安心して眠れていないのではないかと。

<仮説3>「安心感の不足」

生活そのものは分かりやすくなったはずだが不安は消えない、周囲の人に対する信頼感の消失。これまで、Aさんは母親への愛着が強く、保護者もそれに答えておられたが、他害行為などにより母親との距離が離れ、満たされていたものが徐々に得られなくなっているということも考えられた。これまで近い距離で関わられていたので、母親との距離が離れることは、私たちが想像する以上に喪失感は大いなものだったのかもしれない。支援者も同様に、個別の対応をとったことで、結果的にやりとりをする場面を限定してしまい、思いと違うことも含め不安を増したのではないかと。

「生活支援と再構造化」

感覚刺激の変化や睡眠の確保、安心感の不足という仮説から、これまで中心に行ってきたスケジュールや視覚的支援などの再評価を行い、その理解の度合いによっては生活が窮屈にならないための「再構造化」を検討した。

まずは、睡眠の確保を優先することと、息苦しきの減少に向けた生活環境の再設定を行った。

1) 居室の変更および室内の再構造化

・平成15年に個室化を進めるため居室を増設し、そこにAさんに移っていただいていた。居室は畳から洋室に変更した。これは、アレルギー性鼻炎への配慮と、生活の場を一新することで、自分の居場所を明確にするという目的がありその際

ベッドを導入した。

平成18年頃から自由時間にベッドの上で横になることが多くなっていった。その寝方は「気をつけ」の姿勢のまま横にな



っており、指先にまで神経を尖らせているといった姿勢でゆったりとした休み方が出来なくなっている印象を受けた。また、ベッドの置き位置が気になるのか何度も壁に押し付ける行動も頻繁に見られるようになり、時にはベッドを激しく叩く場面も見られるようになっていった。

安心できない＝落ち着かないという仮説から、平成21年1月から居室を（写真下の）畳の部屋に再変更し、ベッドを撤去して自分で布団の上げ下ろしをするようにし、押し入れの扉はカーテンに変更した。居室移動初日は、日中の空き時間は自分で毛布を出し、畳で横になりすぐに眠った。その際の寝姿は、これまでとは違い安心して休まれている印象を受けた。その日は1回だけ衣類を破る行動を見せたが、以後はその行動は消失した。

一日の予定を伝えているスケジュールも同様に、向きや角度にこだわる一方で、扱いが雑なことから、木製の頑丈なカードを使用していた。ラミネートフィルムでの加工では、カードの示す意味よりも微妙なズレを気にして、集中することができなかつたため、硬い材質のものに変更して、左右が正確に揃うような工夫もした。カードの意味を理解し、行動に移せていたが、次第にカードを強く張り付け、音を出すことにこだわり始めた。しかし、活動が行えていたため、あまり問題視はしていなかったが、本来の意図とは違うところに意識が向き出していると判断し、カードの材質をやわらかい物に変更したところ、強く扱う行動は消失した。

このような修正を生活の所々で行う内に、下駄箱や扉の開閉など、強迫的に行っていたこだわりが、少しずつ頻度や程度も和らいでいき、常に眉間にしわを寄せていた表情も緩やかになっていった。また、出会い頭の他害行為や突発的な破衣行為は、時折見られていたが、気持ちの刺々しさは薄れていたため、場面設定を慎重に行うことを前提に、個別から少集団に戻すという取り組みを徐々に始めた。

2) 食事

食事の準備を職員と行うよう変更、準備が終わったら食事を食べるという流れに整理した。本人にとっての動機が明確で、特に食べ物への興味は強いこ



とから、食器を並べる活動を中心に設定した。また、取り分けは難しいので、準備できた物を

お膳に置いてもらうことを支援者と一緒に取り組み定着している。

3) 掃除

道具一式を職員がカバンに入れておき、カバンを渡すことで活動が始まる。掃除の回数はチップで伝えている。このチップを使った方法は支援開始当初から行っており、理解が高く終わりも明確なため安定した活動となっている。また、通りかかる職員からも褒めてもらうことが増え、よい活動となった。

4) 課業

日中活動では、取り組み易い活動やその量、課題を通して特性の再確認を行った。14種類の自立課題があるが、様々な組み合わせで行いながら、一回の活動量は7課題を目途に行っている。途中で身体を動かす活動が2回程度入ることで、飽きる様子は見られていない。掃除と同じようにチップを使って散歩や自転車こぎの回数を伝えている。Aさんの状態や理解度に合わせて内容を調整し、そこで得られた情報を生活棟に伝え生活面でも応用していただくよう連携している。

5) Aさんのコミュニケーション（表出）への支援

Aさんは、単一語の音声言語で意思表示がある。例えば言葉で「みみ」と言えば綿棒がほしい、「かみかみ」と言えばトイレトペーパーか、お絵かき用の用紙といった意味がある。支援者もその意味は理解しており当初は要求を肯定的に捉えていたが、次第に要求が増え、支援者がその要求に応えられないとイライラから他害行為へつながっていた。受け止め方や対応が支援者によって異なり一貫性のない曖昧な関わりになっていたことが原因であった。

そこでやり取りの方法を整理することとした。Aさんも意思表示が簡単に行えるように、要求ボードを部屋に置き、欲しい物があるときにはカードを持ってくる方法へ変更した。この理解は早く、要求の際にはボードを使用することが定着し、お互い関わり易くなった。

ある日、ラーメンを食べに行った時のこと、すでに大盛りラーメンを食べた後であったが、メニューの上を指でなぞっており、もっと食べたいという要求であった。食器をさげるよう指示するとお代わり要求は消失し、その後も不調に至ることはなかった。日常生活の中で、表出を受け止める取り組みを続け、その中で、「終わりの理解」、そして「次は何を」の理解が進んだことが成果として現れたと考えている。



最後に、

平成21年から必要な支援は継続しつつ、居室の変更の他、スケジュールやワークシステムの見直し等生活全般に渡り見直しを行ってきた。生活環境が落ち着くことで粗暴行為や強迫的なこだわりは徐々に和らいでいき、下駄箱へのこだわりや足を踏み鳴らして歩いていたのが自然に歩行できるようになり着脱の際に力んで衣類を扱っていた行為も現在は全く見られてはいない。

生活場面でやっている手伝いも定着し、平成21年後半には、今日は帰省がある日なのかという事や、週に一回しかないような活動についても、スケジュールの変更を用いて対応し、Aさんが知りたいことを分かりやすく伝えるようにしている。また、これまで取り組むことが出来なかったコミュニケーションの支援も開始した結果、Aさん自らスタッフに寄ってくることも多くなり、待つことの理解や今はダメといった理解も進んでいった。

粗暴行為や強迫的なこだわりの和らぎから、豊かな表情が見られるようになり、これまで何年も行ってきた他害行為・衣類の破損などはここ数年間ほとんど見られていない。『構造化』の名のもとにAさんの生活を過ごしやすくしようと支援しているつもりであったが、私たちの支援が結果的に負担になっていることに気が付かないまま支援を継続したことで、破衣行為へ発展してしまった。そこには、自閉症という思い込みで、特性理解を一方向的に捉えすぎ、Aさんの生活を全般的、多面的に捉えることが出来なくなっていたことにも気付かされた。

現在では、行動障害は改善されている状況だが、Aさん自身の生活の背景や、生活スタイルの見直しを行うことによって、様々な視点で捉えることの大切さを再認識できた。

利用者と共に生活を送る中で、いつの間にか行動や状態が変化していることは意外とあることに気付かされる。権利擁護や合理的配慮が求められる現在の支援現場において、単に利用者の状態や支援内容を共通認識するだけではなく、生活の基本である“眠れているか・食べているか・排泄は？”といった当たり前のことが整っているかを確認することを怠ってはならない。また、利用者の行動の些細な移り変わりを気に留め、変化に気付くことはとても大切で、支援が必要と判断した際には、背景を探りながら、どのように捉えどの部分に支援や修正を加えるのか、その修正開始のタイミングもチームで検討することは支援を揃える意味においてとても重要である。利用者から信頼される支援者であるためにも、利用者自身が安心して過ごすことができる、分かりやすい生活の構築が必要であると改めて学んだ事例である。